

# 郷土博物館・文学館だより

## 第21回 渋谷現代短歌募集 優秀作・佳作発表

渋谷には、明治時代から現在に至るまで多くの文学者が住み、近代短歌の発展に貢献してきた雑誌『明星』や『アララギ』も渋谷で発行されました。当館では、こうした渋谷の文学風土を継承し、区民をはじめ多くの方々に渋谷を再発見していただく機会として、年に一度、「渋谷」を題材にした短歌を募集しています。

21回目の開催となった令和2年度は、25名から82首の作品が寄せられ、選者・豊島秀範先生（國學院大學名誉教授）によって優秀作5首、佳作5首が選ばれました。入選作の作者には、当館主催の文学講座「短歌を学ぼう」で短歌の作り方を学びながら応募し、受賞に至った方もいらっしゃいました。

作品を書写した色紙は、4月1日から11日にかけて、当館にて展示を行いました。

12月からは、これまでの「渋谷現代短歌」に加え、「渋谷現代俳句」の募集を企画しております。多くの方々の応募をお待ちしております。



第21回渋谷現代短歌発表 展示室

### 第二十一回渋谷現代短歌（優秀作・佳作）

國學院大學名誉教授 豊島秀範選

#### 〔優秀作〕

「我れこそは！」とビルはお洒落に着飾って

渋谷のシンボル競って背伸び（椛澤かほる）

夕ぐれに若木タワーのすぐ上を

羽田における飛行機が行く（竹内 貞雄）

早春の神宮の森さえわたり

砂利ふむ我の足音ひびく（中井真知子）

井の頭線めざし人波くぐる時

わたし一尾の若鮎となる（藤崎 桂子）

秋晴れの渋谷SKYで寝ころんで

空の重みをからだに受ける（吉田のぞみ）

#### 〔佳作〕

毎日の渋谷の出入が映される

ゼブラゾーンに今日は雨傘（赤野 貞子）

本村のクスノキめぐる陣取りに

雀大群カラス追い出す（浅生 享）

都心より渋谷に嫁ぎて六十年

街の復興よみがえりくる（小林 貞子）

夏の日に迷子になりし駅ホーム

孫の手にぎり過去と対話す（藤田 容子）

渋谷区に生まれてそだった私です

父といっしょに長いきします（松田 岳美）

## 古賀政男と代々木上原

「古賀メロディー」、皆さんはこの言葉を聞いて何曲くらい曲が思い浮かぶでしょうか。この曲調を生み出した人こそ作曲家・古賀政男であり、日本の流行歌史上欠かせない人物の一人です。昨年のNHKの朝のテレビ小説「エール」は、作曲家・古関裕而とその妻・金子の物語でした。古賀も別名でしたが作曲の仲間として登場していたのは、記憶に新しいところです。

古賀政男は、明治 37 年（1904）福岡県三潁郡田口村（現、大川市）に、父・喜太郎、母セツの五男として生まれ、当初は「政夫」と名付けられました。後に音楽活動をするようになると「政男」と名乗るようになったそうです。

5 歳で父が死去し、大正元年（1912）8 歳の時、長兄の福太郎を頼って家族四人は朝鮮の仁川に渡ります。仁川では母方の親戚が農機具問屋をしており、その従兄妹と古賀はよく遊びました。この時、従兄の草刈良介からもらったものが大正琴で、古賀のはじめての楽器でした。その後、長兄・福太郎は独立し、京城に古賀商店を構えることになりました。古賀はそこで小学校を卒業し、大正 6 年には善隣商業学校に入学しました。学校では学内楽団を作り、マンドリンをはじめいろいろな楽器を手にしました。

大正 11 年 3 月、善隣商業学校を卒業すると、長兄の命により大阪の徳本商店に勤務しましたが、約 1 年たった頃、早稲田大学の学生で千駄ヶ谷に下宿していた従兄の草刈を頼って上京します。上京後、古賀は大正 12 年に明治大学予科に入学し、マンドリン倶楽部の創部にも加わったほか、作曲も手掛けるようになりました。

明治大学商学部を昭和 4 年（1929）に卒業した古賀は、代々幡町字上原（現、渋谷区上原）に一軒家を借りました。古賀は、その家から駿河台音楽院まで通い、教べんを採りながら作曲も続けていました。昭和 5 年には「文のかおり」、「日本橋から/影を慕ひて」を佐藤千代子がうたってビクターから発売しますが、ヒットとはなりませんでした。

昭和 6 年、古賀はコロムビアの専属作曲家となり、「キャンプ小唄」「酒は泪か溜息か」「丘を越えて」「影を慕ひて」などが大ヒット、その後、テイチクに移ってもヒットを連発しました。

昭和 12 年、古賀は代々木上原に「音楽村」を作ろうと三千坪の土地（現在の古賀政男音楽博物館の場所）を購入します。上原は、コロムビアで曲が売れるようになった縁起の良い土地だったからです。翌年には新居も完成しました。

その後、音楽文化親善使節でアメリカ等を訪問中、弟が無断で上原の土地を売却してしまう事件が起こります。それでも上原の土地にこだわった古賀は、戦後の昭和 27 年になってやっと買い戻すことができ、ここ上原の自宅から、数々の名曲を生み出すことになりました。



昭和 13 年頃の代々木上原（道路右側の家が古賀邸）



## 『嘉陵紀行』と渋谷の名所

コロナ禍の中、行楽地へ行く機会はめっきり減りました。そこで代わりに江戸時代の渋谷の名所について触れた紀行文を眺めてみることにしましょう。ここでとりあげるのは、村尾正靖（1760-1841）の書いた『嘉陵紀行』です。「嘉陵」は正靖の号です。もともとこの紀行文にはタイトルがなかったようで、この名前は大正時代に出版する際につけられたものです。国立国会図書館で所蔵する自筆本には、『江戸近郊道しるべ 四方の道草』と記されていますが、これも後からつけられたものです。

正靖は御三卿の一つ、清水徳川家に仕えていた武士で、奥向きの業務全般を取り仕切る御広敷用人を勤めていました。多忙の公務の合間をぬって、寺社を中心に江戸の近郊の名所旧跡を日帰りで訪れ、そのときのことを和歌などを交え、ときには簡単な図や画も載せて記録しています。その行動範囲は広く、江戸周辺のほか現在の埼玉県和光市、神奈川県川崎市、千葉県千葉市方面までも足を運んでいます。

渋谷区内では、広尾から金王八幡宮にかけて、そして代々木八幡宮周辺の記事が詳細で、ほかに道玄坂や千駄ヶ谷付近についても記録しています。中でも金王八幡宮周辺は二回訪れ、「渋谷金王丸城跡」とその近辺の史跡について、正靖よりも百年近く前に書かれた江戸の名所案内『江戸砂子』などの記載を見比べながら、逐一検証を試みています。しかし、今ではほとんど跡形もないことになりました。

また文献ではなかなか残らない情報も書き留めています。例えば氷川神社では、そこで草刈りをしている人に何をしているのかたずねています。その人は「爰（ここ）は九月廿九日、神事の角力ある芝生也、やがて其頃にも成ゆへ、草刈平け其まふけすとぞいふなる、角力を業とするものも、たまさかには出れども、先は近郷の若きものあつまる、行事は其すじのものをやとふ」と答えています。現在でも氷川神社にはその土俵が残されていますが、この記事はそこで行われていた「金王相撲」に関する貴重な記録となっています。

ところで、驚くのはこの日帰り旅行をしていたときの正靖の年齢です。記載上、一番若い(?)ときで47歳、多くは60歳以上です。70代になっても、江戸の中心部から現在の東京都日野市や千葉市まで一日で往復しています。

旅と筆を愛した正靖は81歳でその生涯を閉じました。



現在の氷川神社境内の土俵



下拝殿

## 文化財紹介

国指定重要文化財

「明治神宮」 36棟

(大正9年及び昭和33年)

(令和2年12月23日 指定)

所在地 代々木神園町1-1

緑豊かで、多くの人に親しまれている明治神宮は、令和二年十一月一日に鎮座百年を迎えることとなりました。

明治神宮は、大正四年(一九一五)五月一日、明治天皇・昭憲皇太后を祭神として、東京府下豊多摩郡代々幡村大字代々木に官幣大社として、創建することが発表され、大正九年に創建されました。

明治神宮の造営につきましては、近代における神社建築とは如何にあるべきか、という問題をはじめて正面から取り上げたケースとして、日本近代建築史上重要な位置づけがなされています。

本殿を含む建築物の設計は、伊藤忠太が指揮をとり、安藤時蔵が担当し、その死後は大江新太郎が引き継ぎ完成します。本殿の建築様式については、新様式が提案されましたが、結局、伝統的な流造りに落ち着き

ました。但し、外陣と向拝を付随するという新たな試みがなされたのです。

ところが、昭和二十年(一九四五)四月の空襲により本殿を含む社殿の北半分を失います。復興計画は同二七年十一月にはじまり、同三三年に竣工した復興社殿は、近代における神社のあり方を探求した角南隆(すなみたかし)が指揮をとり

ました。角南は、内拝殿と下拝殿という二つの拝殿を設け、神職の奉祀と一般の参拝者とをわけた形式としました。

また、安藤の屋根勾配を緩やかにした建築と角南の勾配を少しきつめにしつつ、曲線を強調して力強さを表現するという、二つの建築が融合していることも特徴です。

近代建築史に足跡を残す人々たちによる神社建築の存在は、渋谷区にとっても重要で、高い価値を有するものです。

### 【今後の展示予定】

◆企画展「オリンピックの料理人が見た  
東京大会1964」

10月10日(日)まで

◆特別展「寺院が語る渋谷の歴史」

10月19日(火)

～令和4年1月10日(月・祝)

◆企画展「道玄坂のむかしばなし

—藤田佳世の作品世界—(仮)

令和4年1月18日(火)

～3月27日(日)

### 白根記念

### 渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 11:00～17:00(入館は16:30まで)

土曜日のみ9:00から

休館日 ◆ 月曜日(休日の場合はその直後の平日)・年末年始

入館料 ◆ 一般:100円(80円) 小中学生:50円(40円)

※1日以内は10名以上の団体料金

※60歳以上の方・障害のある方と付き添いの方は無料

お問い合わせ ◆ 東京都渋谷区東1丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.47

令和3年8月1日発行